

ウェブを活用した香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
—「雑談」の効果—

A Study of Cooperative Learning through the Use of Social Media
by Japanese-language Learners in Hong Kong and Japan-based Teacher Trainees:
The Effectiveness of “Chatter”

上田 早苗 / 中西 久実子
香港中文大学 / 京都外国語大学

要旨

インターネットが普及している今日、SNS やスカイプなどを活用して遠隔地を結んださまざまな実践の報告が行われている。筆者らは2008年から2011年までの3年の間に3回にわたって、香港の大学の日本語学習者と、日本の大学で日本語教師を志して学んでいる学生（実習生）をウェブ上で交流させ、日本語学習者には「日本語で作文を書く」能力を向上させること、実習生には「日本語教授法」の習得を促す「協働学習」を実践した。2回目である2009年度には、他の年度には見られなかった「雑談スレッド」が出現し、発言が最も活発に行われた。そこで、本来の目的である「作文」とは関係がなく、一見重要ではないように見える「雑談」が交流の活性化を促した、という仮説を立てて検証した。その結果、以下のことがわかった。

- ①「雑談」は学習共同体のメンバーである実習生と学習者のよい関係を構築し、交流の活性化に役立った。
- ②「雑談」は学習者の日本語力（口語の中で使う文法・語彙、書き言葉と口語的な表現の使い分け）の向上に効果がある。

キーワード：

ウェブ、協働学習、雑談、交流の活性化、学習共同体

ウェブを活用した香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習 —「雑談」の効果—

上田 早苗 / 中西 久実子
香港中文大学 / 京都外国語大学

1. 実践の背景

香港の大学で日本語を学ぶ学生にとって、普段、日本語を使ってコミュニケーションを取る機会は少ない。一方、日本では、日本語教師を目指す学生が教育実習を実施できる時間は多くなく、実際に学習者に接する機会は限られている。そこで、2008年から2011年までの3年の間に3回にわたって、香港の大学の日本語学習者（以下、学習者）と、日本の大学で日本語教師を志して学んでいる学生（以下、実習生）をウェブ上で交流させ、学習者には「日本語で作文を書く」能力を向上させること、実習生には「日本語教授法」の習得を促す「協働学習」を実践した。よく知らない者同士によるウェブ上の交流においては、発言（ウェブ上の書き込み）が滞ると交流そのものが成立しなくなるため、いかに交流を活性化させるかが大きな課題であった。

インターネットが普及している今日、SNS¹やスカイプなどを活用して遠隔地を結ぶさまざまな実践の報告が行われているが、活性化の要因について研究したものは少ない。中西・村上・上田(2011)では、SNSを用いた作文添削の交流の実践を報告し、交流の活性化のためには、参加者が社会的存在感²とソーシャル・サポート³を感じることが必要であると主張している。そして、SNS そのものや交流の方法に改良を加えた結果、交流が活性化し、その現れの1つとして「小論文以外の話題の出現」（雑談）を挙げている。

「社会的存在感」及び「ソーシャル・サポート」は、近年、注目されてきている。山田・北村(2010)では、CSCL⁴研究における社会的存在感に関する考え方や知見を整

1 ソーシャル・ネットワーキング・サービス

2 SHORT *et al.* (1976) : 他者との相互作用において（受容される）他者の顕現性(Salience)の程度、またその(相互作用の)結果として起こる対人関係の顕現性の程度(the Consequent Salience of Interpersonal Relationship)

3 三浦・上里(2012) : “家族や友人、あるいは隣人などの個人を取り巻く様々な人々からの有形無形の援助”と定義される

4 山田・北村(2010) : Computer-Supported Collaborative Learning

上田 早苗 / 中西 久実子：ウェブを活用した
香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
－「雑談」の効果－

理した上でどのような研究が行われているかを紹介し、「社会的存在感を高く感じている学習者ほど学習に対する満足感が高いことを示している」と述べている。また、望月・北澤(2010)では、SNS を活用し、教育実習生（日本語母語話者）が実習期間中の体験報告に基づいた対話を行う場を提供することで、教育実習の振り返りを促進するとともに、SNS の日記とコメント機能によって教育実習生が実習期間中に身近なソーシャル・サポートが得られるようになったことが示されている。「雑談」の効果に言及した研究は多くないが、重田・三浦(2011)では、博士論文を英語で作成することを目指す工学系大学院留学生を対象に研究生生活に必要な日本語能力と研究室において留学生が参加すべき活動について調査を行い、「(留学生は)日本人学生との日本語による雑談が順調な研究生生活と切り離せないものであることを認識していた。」と指摘している。

実践を行う中で、筆者らは、学習共同体⁵における「雑談」の効果にもっと注目すべきではないかと考えるようになった。「雑談」が交流の活性化につながっているのではないかということ、また、「雑談」と「社会的存在感」や「ソーシャル・サポート」の関わりについてもさらに考察してみたいと考えた。もし「雑談」の効果が検証できれば、ウェブを活用した学習に限らず、広く学習共同体の学びに応用できると考えられる。そこで、本稿では、本来の目的である「作文」とは関係がなく、一見重要ではないように見える「雑談」がウェブ上に作られた学習共同体の交流にどのような影響を与えたのか、実習生と学習者の実際の発言、やりとりを見ながら検討していく。

2. 実践の概要

2.1 期間

本実践は2008年9月から2011年1月までの間に、3回にわたって行った。1回目は2008年9月～2009年1月（以下、2008年度）、2回目は2009年9月～2010年1月（以下、2009年度）、3回目は2010年9月～2011年1月（以下、2010年度）である。

5 「学習(者)共同体」とは、「教室における学習者集団を『共同体(community)』としてとらえる」(スカーダマリア・ベライター・大島(2010))ものであるが、本稿では、交流に参加した参加者(実習生と学習者)の集まりも、ウェブ上のコミュニティで共に学ぶ「学習共同体」と考える。

2.2 参加者

学習者は、香港の大学で「上級日本語作文」を履修する学部3・4年生と大学院1年生で、1名を除き全員1年間の日本留学経験があり（留学経験のない1名は日本語能力試験2級合格者）、母語は中国語（2008年度に1名のみ北京語母語話者が含まれる。他は全員広東語母語話者）である。実習生は、日本の大学で「日本語分析演習Ⅱ」を履修する学部3・4年生で、全員が日本語教育を専攻する学生である。日本語母語話者が多数を占めるが、中国語、韓国語を母語とする留学生が含まれている。香港の学習者、日本の実習生とも、各回のメンバーは全員入れ替わっている。

表1 参加者の内訳

	2008年度		2009年度		2010年度	
	母語	人数	母語	人数	母語	人数
学習者 (香港)	中国語	10名	中国語	11名	中国語	11名
実習生 (日本)	日本語	9名	日本語	15名	日本語	6名
	中国語	2名	中国語 韓国語	2名 2名		
計		21名		30名		17名

2.3 交流の進め方、スケジュール

学習者は作文（小論文）の完成を目指し、ドラフトを作成して、実習生から文法や語彙の使い方について添削を受けたり、内容についてコメントをもらったりする。交流は、まず自己紹介文をアップロードし、お互いを知ることから開始した。2008年度は1対1であったが、2009年度と2010年度は、学習者と実習生のグループを作り、グループごとにウェブ上の掲示板（話し合いの広場）でやりとりを行った。自分が属するグループ以外のスレッドも、お互いに自由に閲覧、発言（書き込み）ができるようになっている。交流のスケジュールは表2のとおりである。学習者側の教師は、この交流授業と平行して、論文の構成、論文で使われる表現などを学習者に教えた。

学習者が書く作文のテーマは、各回とも「日本と関係のあることなら基本的に何でもよい」ことにし、各自興味のあるテーマを選ぶように指示した。学習者は、作文のテーマ選びについて実習生とウェブ上で意見交換をした後、テーマを決定して交流を進めた。表3は2009年度に学習者が選んだテーマである。

上田 早苗 / 中西 久実子：ウェブを活用した
 香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
 - 「雑談」の効果 -

表2 スケジュール

	2008年度	2009年度	2010年度
自己紹介文 アップロード	9月25日	9月23日	9月21日
小論文テーマ アップロード	10月9日	10月7日	10月5日
小論文キーワード アップロード	10月16日		
動機エッセイドラフト アップロード	10月23日		
動機エッセイ アップロード	10月30日	10月21日	10月19日
ドラフト1 アップロード	11月6日	11月4日	11月11日
ドラフト2 アップロード	11月13日	11月18日	11月25日
最終版小論文 アップロード	11月27日	12月2日	
相互評価シート（アンケート）実施	1月28日	12月18日	1月13日

表3 学習者の作文のテーマ（2009年度）

「日本」の読み方から背後の原因を探る	日本の声優コンサートとその魅力
女性はなぜBLに夢中になるか	香港の若者から見た日本人をめぐる調査
日本人の食文化の変化，問題点とその対策	香港と日本の若者の携帯電話の使用状況
若者にとっての「おしゃれ」の意味	現代における敬語の乱れと変化
食事代は男が払う？女が払う？ -日本人の支払いのマナー-	日本の公衆浴場についての一考察 -銭湯の役割と社会の変化-
日本男性の化粧における 男女のジェンダー関係についての一考察	

3. 仮説

3.1 発言回数と仮説

どの回が最も活発に交流していたのか見るために、まず各回の発言回数をみてみた。各回の参加者数が異なるので、1人あたりの平均発言回数を調べた。結果は表4のとおりである。この結果をみると、2008年度、2010年度と比べて、2009年度の発言回

数が明らかに多いことがわかる。では、なぜ 2009 年度はこのように発言が活発になされたのだろうか。2009 年度が他の回と異なっていたのは、実習生と学習者の間で盛んに「雑談」⁶が行われていたことである。それを象徴する出来事として、2009 年度の全 5 グループのうち 1 つのグループ（グループ 4）において、実習生からの自発的な提案により「雑談スレッド」が立てられた。そこで、「雑談」が交流の活性化に効果があった、という仮説を立て、検証していきたい。

表 4 発言回数

	2008 年度	2009 年度	2010 年度
総発言回数	97/21 人	345/30 人	97/17 人
1 人あたりの発言回数	4.6	11.5	5.7

3.2 「雑談スレッド」の出現

2009 年度は、どのグループも作文のための話し合いの中に下の(1)のように雑談が混在していたが、交流期間の半ばを過ぎた 11 月、グループ 4 の実習生の 1 人が (2) のような発言をして、作文の話し合いとは別に雑談専用のスレッドを立てた。

(1) 皆さん、
学祭はどうでしたか？楽しく過ごしていましたか？

A さん、
日本語を直してくれてありがとう！「～たい」と「～て欲しい」はそんなに難しくないが…間違っって恥ずかしかったです。

コメントくれてありがとうございます。A さんの意見のとおり、化粧品を扱っている企業とヘアケアを序論で書きました。

ちょっと困ったことがあったんですが、先行研究を探しているとき、MILLER という方の研究を読んで、動機エッセイの問題提起をたいてい回答してしまいました。それで、今の序論は問題提起と方向付けの部分はすこし変わりました。

6 本稿における「雑談」とは、「作文と直接関係のない発言」を指す。例えば、趣味や食べ物の話題、近況報告などである。

上田 早苗 / 中西 久実子：ウェブを活用した
香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
－「雑談」の効果－

学祭でおどりましたか？すごい！〇〇大（学習者の所属する大学）には類似のことがあります。「開放日」と言いますが、色んな学科がそれぞれに宣伝するだけです。ダンスなどのパフォーマンスがありません。（略）（2009年11月5日 学習者 a）

(2) こんにちは

みなさんともっと②お話がしたいなあ～と思って新しいスレッドをたてました。
なんでも好きなことを話す場にしませんか？
ぜひぜひ楽しいことなどを共有しましょう↑↑（2009年11月9日 実習生 A）

そして、「雑談スレッド」を立てた実習生自ら雑談を始めた。翌日、同じグループの学習者1名から返事があり⁷、「雑談スレッド」でのやりとりが始まった。この雑談スレッドは作文のスレッドと並行して12月に交流が終わるまで続けられた。

(3) こんにちは☆

この間（？）ちょっと前、『不能説的・秘密』という映画を見ました↑↑
とてもきれいな音楽とピアノの腕前に感動しました。ストーリーも切なくて…
でも目が離せなくて…良い映画に出会ったな^U^とうれしい気持ちになりました。
（2009年11月9日 実習生 A）

(4) 不能説的・秘密見ましたか？いい映画たっだですねー

この前、映画館でマイケル・ジャクソン THIS IS IT 見ました。
とても感動した。
最近何が面白いことがありますか？（2009年11月10日 学習者 b）

3.3 「雑談スレッド」が立てられなかったグループの雑談

その他のグループでは、「雑談スレッド」は立てられなかったが、以下の例(5)、(6)に見られるように作文のスレッドの中に雑談が含まれていた。

7 本稿で引用する学習者の発言の中には、文法上のミスや日本語として不自然なものもあるが、すべて原文のままである。

(5) (略) 50問もアンケートを作るのも、大変だったと思います。第5位までの5つだけでもとてもおもしろかったです^^インタビューの結果も楽しみにしています☆

Cさんの研究を読んでいたら、どんどん香港に興味がわいてきました!!香港がどんな国なのか、勉強しようと思っています♪あ、最近嵐が好きになりました!♥櫻井くんにはまっています~♪ (2009年11月25日 実習生F)

(6) Fちゃんへ

香港に興味がわいてきましたか?うれしい~々~ぜひ機会があれば来てください~!案内します!^^

YEAH~Fちゃんも嵐のファンになったんですね。いいセンスですよ~(笑)櫻井くんは素敵です~顔も頭も~♥けど、私はやっぱりニノの方が好き!(笑)最近嵐10周年になるんですね~私は嵐チャレンジ WEEKの番組もちゃんと見ましたよ~面白かったです☆

テンション上がりすぎでごめんなさい。では、レポートの件なのですが、(略)

(2009年11月30日 学習者c)

4. 仮説の検証

4.1 「雑談スレッド」出現前と出現後の発言頻度

「雑談スレッド」の出現は、実習生が意識的に且つ積極的に「雑談」をするようになった表れである。実習生のこの働きかけが交流に与えた影響をみるため、「雑談スレッド」出現前と出現後の発言頻度を比較した。ただし、交流の最初に学習者がアップロードした「自己紹介」は、教師の指示により全員にアップロードさせたものであり、自発的なものではないため除く。「自己紹介」アップロード後は、実習生、学習者とも自発的に書き込みを行ったので、それらを対象とした。

表5 グループ4の発言頻度

	出現前		出現後
期間	10月2日~11月8日		11月9日~12月2日
発言回数	32/38日		38/24日
1日あたりの発言回数	0.8	⇒	1.6

表 6 全体の発言頻度

期間	出現前		出現後
	10月1日～11月8日		11月9日～12月9日
発言回数	165/39日		178/31日
1日あたりの発言回数	4.2	⇒	5.7

「雑談スレッド」が立てられたグループの発言頻度（表5参照）は、スレッド出現後に出現前の倍になっている。これは、「雑談スレッド」出現後、雑談だけではなく、本来の目的である作文についてのスレッドにおいても発言頻度が高くなっていることを示している。

全体の発言頻度（表6参照）も、「雑談スレッド」出現前より出現後の方が上がっている。交流中は、自分が所属しているグループ以外のグループのスレッドも自由に閲覧できるようになっているため、「雑談スレッド」が立てられたグループのやりとりで触発されて、他のグループでも活発に発言がなされるようになったのではないかと考えられる。

4.2 表記・表現からみる仮説の検証

前節では、積極的に「雑談」をすることによって、参加者全体の発言が増加したことがわかったが、本節では、「雑談」の内容が学習者の表記や表現に与えた影響について考察する。「雑談スレッド」が立てられたグループ4のやりとりを例に挙げる。

4.2.1 口語的な表現の多用

2009年度は、雑談の中で口語的な表現が多くみられた。例えば、学習者は、最初の自己紹介では(7)のように「～なければならない」を使用している。実習生は全般にわたって(8)、(9)のように縮約形を使用し、学習者の発言の中にも(10)、(11)のように縮約形が見られるようになる（下線は筆者による）。

《縮約形》

(7) 得意なことは別になんですが、苦手なことは右手でやらなければならないことです。(2009年9月23日<開始から第1週目> 学習者 a)

(8) 土日は家にこもると言いましたが、こもってるときは、基本アクアリウムか読書に没頭します。(2009年10月6日 実習生B)

(9) この映画が大好きすぎて本やCD、楽譜などを次々買っちゃいました。

(2009年11月13日 実習生A)

(10) ところで、わたしは日本語作文のコースで期末論文を書かなきゃならないんですが、以下のテーマは皆さんどう思いますか？

(2009年10月7日<開始から第3週目> 学習者a)

(11) タイプしたコメントがセッションのオーバータイムで消えちゃった。

(2009年11月28日<開始から第10週目> 学習者a)

次の「～けど」も、口語的な表現である。交流の前半は、学習者は(12)のように「～が」を使用していたが、(13)のような実習生の書き込みを見て、(14)のように「～けど」を使用するようになった。

《けど》

(12) 添付ファイルを見てください。文法の間違いがたくさんあるかもしれないが…コメントお願いしますね～(2009年10月21日<開始から第5週目> 学習者a)

(13) 美味しいとは思わないけどレシピを見て作るのが大好きで味を試すために作って友だちに食べさせます。^^ (2009年10月7日 実習生E)

(14) そして、日本語訳がまだないらしいけど、The Memory Keeper's Daughter も感動的。(2009年12月3日<開始から第11週目> 学習者a)

その他、学習者が実習生の書き込みを見て積極的に使うようになったのではないかとと思われる語彙、表現を以下に挙げる。

《すごく》

(15) 新しい友達ができるとき、すごくうれしいですね(^▽^)♪

(2009年10月6日 実習生C)

(16) Dさん、伊勢海老の天麩羅を食べたことがあります。ふわふわですごくおいしかったです！(2009年10月14日 学習者a)

(17) 「日本人の知らない日本語」を読みました！すごく面白いですね！

(2009年11月17日 学習者a)

上田 早苗 / 中西 久実子：ウェブを活用した
香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
－「雑談」の効果－

《あと》

- (18) あと、遅くなりましたが HAPPY HALLOWEEN ↑ ↑ (2009 年 11 月 4 日 実習生 A)
(19) あと、香港人はレストランに贅沢なクリスマスディナーをすとか、(中略) そういうのは一般的ですね。(2009 年 12 月 3 日 学習者 a)

《おすすめ》

- (20) 何かおすすめの紅茶があればぜひ教えてください。
(2009 年 10 月 2 日 実習生 A)
(21) 中国にも行ってみたいのですが、どこへ行くのがおすすめですか？
(2009 年 10 月 6 日 実習生 B)
(22) お勧めな紅茶ですか？アールグレイは飲んだことありますか？
(2009 年 10 月 7 日 学習者 b)
(23) 香港のおすすめ品ですね… (2009 年 11 月 3 日 学習者 a)

《ちなみに》

- (24) 昨日入れた紅茶は…かなりまずくて残念でした。ちなみにそれは「キャラメル
バナラ」という名前でした。(2009 年 10 月 27 日 実習生 A)
(25) ちなみに私が一番好きな本はやっぱり Gaston Leroux の「THE PHANTOM OF THE
OPERA」です。(2009 年 11 月 13 日 実習生 A)
(26) ちなみに、わたしはシドニー・シェルダンの大ファンです！
(2009 年 11 月 17 日 学習者 a)
(27) ちなみに「紅葉」の読み方は「こうよう」か「もみじ」か？同じですか？
(2009 年 12 月 3 日 学習者 a)

《なんといっても》

- (28) チョコレートは日本のものかというと、何といっても Ghana のブラックが一番で
す。(2009 年 10 月 13 日 実習生 A)
(29) 香港のオススメ品ですね…これはなんといっても臭豆腐です！
(2009 年 11 月 3 日 学習者 a)

学習者は全員日本語能力試験 2 級以上の力を持っているので、上に見てきた表現、語彙を知識として知らなかったわけではないだろう。しかし、実習生が実際に使用するのを見て「このように使えばいいのだ」ということがわかり、使い方が不自然な場合もあるものの、積極的に使用するようになったと考えられる。

4.2.2 実習生の発言を見て学習者が応用している例

次の (30)、(31) をみてみよう。(30) では、1 人の実習生が久しぶりにウェブ上で発言した他の実習生に冗談めかして「おかえりなさい」と呼びかけている。(31) は(30) に対する返事ではなく、忙しくてなかなか発言できなかった学習者が交流に復帰した時に「ただいま」と言っているのである。学習者が実習生の発言を観察して、応用しているのがうかがえる興味深い例である。

(30) (久しぶりに書き込みをした他の実習生に対して)

C ちゃん、B くん、おかえりなさい!? 笑 みんな結構本読むんだねえ〜◎

(2009 年 11 月 13 日 実習生 A)

(31) 皆さん、お久しぶりです。きのう大事な口答発表があるので最近すごく忙しいです。すみません〜でも、修羅場から帰りました。ただいま!

(2009 年 11 月 17 日 学習者 a)

4.2.3 記号

表現や語彙ではないが、実習生は「☆」「♥」などの記号をよく使用しており、学習者の発言の中にも見られるようになる。

(32) 国際交流が好きなので、仲良くしてくださいね!! 気軽にやってみましょう!! b さん、a さん、よろしくお願ひします☆★ (2009 年 10 月 6 日 実習生 B)

(33) 実は昨日まで学祭がありまして…おどってました (フラメンコを♥)

(2009 年 11 月 3 日 実習生 A)

(34) 12 月の夜、寒いですね。でも、皆さんの近況を読んで、すごくうれしいです☆

(2009 年 12 月 3 日 学習者 a)

(35) わたしはたまにテレビを見るじゃなくて、テレビを聴くんです。ニュースやドラマとか。コンピューターとテレビは違う部屋にあるから☆

(2009 年 12 月 3 日 学習者 a)

4.3 考察

このように、学習者が実習生の発言を真似たり応用したりすることによって、口語的な表現や語彙の面で学習者の日本語力の向上につながっていると言える。しかし、そのほかに、同じ表現や記号を使用することによって、同じ学習共同体の仲間であるという意識を高める効果もあるのではないだろうか。菊岡(2004)では、教室のメンバーによって好まれているフレーズが、異なるメンバーによって繰り返し使われることで、メンバーの学習共同体におけるアイデンティティを構築する役割を果たしていると述べているが、実際には対面しないウェブ上においても、実習生と学習者が同じ表現、語彙、記号を使うことで同じような効果を生み出していると考えられる。

5. 傍証-雑談による派生效果

5.1 発言回数が少なくなった学習者への呼びかけ

2008年度と2010年度の交流では、ある参加者がウェブ上で発言しない期間が長くなると、その参加者は交流が終了するまで発言せず、結果として交流が活発にならないということが起こった。しかし、2009年度は、発言回数に個人差はあるものの、途中で全く発言しなくなってしまう参加者はいなかった。2009年度には、例えば(36)のように雑談の中で実習生Aが書き込まなくなった学習者bに対して「病気ではないか」と心配するメッセージを伝え、(37)では学習者b本人が返事をしている。そして、(38)では実習生Aが「戻ってきてくれてよかった」と喜んでいる。

(36) bさん、お元気ですか？今日本ではすごくインフルエンザをはじめいろんな風邪がはやっています。私も先週からのどがいたくていたくて…bさんは大丈夫ですか？(2009年10月27日 実習生A)

(37) bです。Aさん、ありがとうございます。もう大丈夫です。先週熱出たので、ちょっと休みました。(2009年10月28日 学習者b)

(38) bさん、熱だったんですね(^インフルではなかったですか？体調はもう大丈夫ですか？戻ってきてくださってホッ、としました☆(2009年10月28日 実習生A)

さらに(39)では、また書き込みが滞っている学習者bのことを気遣って、実習生Aが他の学習者aに学習者bのことを尋ね、学習者aが(40)のように返事をしている。

(39) ところで、ところで、a さん、最近 b さんは出席されていますか？もしかしてインフルとか風邪になられてないでしょうか？（2009 年 11 月 29 日 実習生 A）

(40) b さんは授業に出ます。でも忙しいそうです。今度会うとき、A さんのメッセージをお伝えしますね。（2009 年 11 月 29 日 学習者 a）

5.2 発言回数が少なくなった実習生の再参加

交流の中では、学習者だけではなく、実習生の中にも発言回数が少なくなる人がいる。2009 年度には、発言しなくなった実習生が再び書き込むようになるという現象も見られた。

(41) みなさん全然コメントできてなくてすみません…お久しぶりです。B です。

（2009 年 11 月 13 日 実習生 B）

また、2009 年度には実習生の中に 4 名の留学生が含まれていた。彼らは、日本在住で日本語教師を目指して勉強している学生であり、日本語力は高いのだが、「自分は日本語母語話者ではない」と自信が持てず、積極的に発言できなくなってしまったようである。(42)、(43) は雑談スレッドが立ったグループ 4 におけるやりとりである。実習生 D は同じグループの実習生 A に相談し、再び発言しようという意欲を見せている。そして学習者も実習生 D の再参加を歓迎する返事を送っている。

(42) みなさんお久しぶりです、私、いつも何のコメントをしたらいいのか結構悩んでいます。だって、自分も外国人で、日本語もそんなに上手じゃないのだから。でも、なんとかしなきゃと思って、このまえ、A ちゃんと相談してみたら「日本語にすることができなかつたら、レポートについての意見を出したらどう」と。なので、これから積極的に意見を出します。よろしくね！（2009 年 11 月 16 日 実習生 D）

(43) D さん、わたしはもっと日本語の勉強をがんばりたいので、コメントをお願いします！レポートのドラフトには問題がたくさんあるので、よろしくね！

（2009 年 11 月 18 日 学習者 a）

そして、他のグループでも交流の終盤になってから (44) のように留学生の実習生 G が、ずっとやりとりを見ていたがコメントはできなかつたと話し、再参加の意思表示をしている。グループ 4 の (42)、(43) のやりとりを見て、影響を受けたと推測される。

上田 早苗 / 中西 久実子：ウェブを活用した
香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習
－「雑談」の効果－

(44) 久々のコメントで香港のみなさんには本当に申し訳ありません。実はみなさんのドラフトは全部見てました。でも、自分の立場も皆さんと同じく留学生なので、自分の中ではやっぱり、日本の友達のコメントが皆さんにとってはもっと役に立つのではないかなあと、コメントすることはできませんでした。これからはちゃんとコメントするようにしますのでよろしくお願いします。^^;;

(2009年11月24日 実習生G)

5.3 考察

2009年度には実習生の方が学習者に積極的に声をかけることで、交流から脱落しないように気を配っている様子がうかがえた。また、いったん交流から脱落しそうになった実習生の再参加も、2009年度に見られた特徴である。また、再参加したメンバーに対して、他のメンバーが歓迎の発言をするというやりとりがなされていた。ウェブ上で一度発言しなくなると、次の発言をするきっかけがなかなかつかめなくなってしまうが、2009年度は普段から「雑談」をすることによって同じ学習共同体のメンバーとしてのよい関係が構築されていたため、再参加することができた。「雑談」の出現は、確かに参加者が社会的存在感とソーシャル・サポートを感じるようになった1つの表れであるが、「雑談」を重ねていくことによって参加者の社会的存在感とソーシャル・サポートをさらに強固なものにするという効果があったと考えられる。

6. 実践後の評価

6.1 アンケート

学習者はこの交流についてどう思っていたのだろうか。交流授業後に実施したアンケートの結果をみてみよう。まず、「実習生とのコミュニケーションはうまく進みましたか。」という質問(表7参照)に対して、2009年度の学習者は11名中10名が「強くそう思う」「そう思う」と回答している。肯定的な答えが2008年度より少し多く、2010年度とは明らかな差がある。また、「実習生との交流は日本語学習者として利点がありましたか。」という質問(表8参照)に対しては、各回とも学習者は「利点があった」と考えているが、「どんな利点がありましたか。(複数回答可)」という質問(表9参照)に対しては、他年度と比較すると、2009年度の学習者が高いパーセンテージですべての選択肢に対して利点があったと答えていることがわかる。特に「文法、語

彙の間違いを指摘してもらえる」「日本人と交流できる」については全員が利点があると回答した。各年度とも回答者数が多くないので、さらに正確な傾向を知るためには調査を重ねていくことが必要であるが、全体としては、2009年度の学習者が最も交流に対して肯定的な評価をしていることがうかがえる。

表7 実習生とのコミュニケーションはうまく進みましたか。

	強く そう思う	少し そう思う	そう 思わない	全くそう思わない/ 該当しない	無回答
2008年度 (9名)	3 (33.3%)	4 (44.4%)	1 (11.1%)	0 (0%)	1 (11.1%)
2009年度 (11名)	3 (27.3%)	7 (63.6%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (9.1%)
2010年度 (7名)	1 (14.3%)	2 (28.6%)	4 (57.1%)	0 (0%)	1 (14.3%)

表8 実習生との交流は日本語学習者として利点がありましたか。

	強く そう思う	少し そう思う	そう 思わない	全くそう思わない/ 該当しない	無回答
2008年度 (9名)	2 (22.2%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)	0 (0%)	0 (0%)
2009年度 (11名)	4 (36.4%)	6 (54.5%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (9.1%)
2010年度 (7名)	2 (28.6%)	5 (71.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

表9 どんな利点がありましたか。(複数回答可)

	文法や語彙の間 違いを指摘して もらえる	他の人の意見を聞くこ とで内容の質を上げる ことができる	担当教師以外の 意見を聞くこと ができる	日本人と 交流でき る	その 他
2008年度 (9名)	7 (77.8%)	7 (77.8%)	5 (55.6%)	6 (66.7%)	0 (0%)
2009年度 (11名)	11 (100%)	8 (72.7%)	10 (90.9)	11 (100%)	0 (0%)
2010年度 (7名)	3 (42.9%)	5 (71.4%)	7 (100%)	6 (85.7%)	0 (0%)

6.2 フォローアップインタビュー

4節、5節でおこなった検証をさらに補強するため、2009年度の学習者（「雑談スレッド」が立てられたグループ4の学習者aさん）にフォローアップインタビューを行った。実施日は2011年6月21日（午後2時～4時）で、半構造化インタビューの形式で行った。

まず、フォローアップインタビューの結果、以下の(45)、(46)のような回答が得られた。このことから、4.2.1節で検証した「学習者が実習生の口語表現を見て同じ表現を真似ている」ということが裏付けられたことになる。

(45) カジュアルな書き方については勉強になった。わたしは日本人の友達はいないので、日本人に対して書く機会はあまりない。でも、インターネットなどで読む機会は書く機会に比べてある。相手があつて、書くことというのは自分は弱いので、特にカジュアルなスタイルを書く練習になった。

(46) 口語的な音便を使ってみました。「そりゃ」とか。日本の大学の学生さんたちも使っていたので、自分も使ってみようかなと。

第二に、雑談による関係性についても、以下の(47)のような回答が得られた。このことから、4.3節で検証した「雑談スレッドが同じ学習共同体の仲間であるという意識を高める効果がある」ということが裏付けられる。

(47) もし雑談スレッドがなかったとして、向こうが直してくれて、こちらも礼儀正しく「ありがとうございました。」と言って、それだけでも交流として悪いということはないと思う。わたしにとって、この交流の経験はあくまでも作文についての交流。だから最も重要なのは論文についての交流。その上で、雑談があつたらもっといい、とわたしも思いますけど。あつたほうが絶対いい、と 생각합니다。交流がもっと楽しくなった。雑談がなかったら、もっと関係が遠かったと思う。

さらに、以下の(48)のように、雑談で関係性が構築されれば作文指導にも影響するという証言が得られた。このことから、5.3節で検証した「『雑談』を重ねていくことによって参加者の社会的存在感とソーシャル・サポートをさらに強固なものにする」ということも補強される。

(48) SNS 交流の場合は、先生と学生の関係じゃなくて、学生同士の間では、構成力の問題とか、言いたくないか、もうちょっとやわらかい言い方で言いたいというか、いろいろな考慮があるんですね。でも、いい関係になったら、少しでも向こうの学生の性格とかキャラクターをつかんで、作文交流でちょっとひどいことを言っても怒らない、とわたしは一方的にそう思うんですね。「雑談スレッド」を立てたほうがいい、しかもできるだけ早い時期に。

「この交流を通じて日本語力が向上したか」と聞いてみたところ、(49)、(50) のような回答が得られ、「向上した」と感じていることがわかる。

(49) 日本語力全体としては、本当に向上したと思う。助詞の使い方とか、論理的な流れとか。

(50) 漢字の問題はなかったと思う。コンピュータで入力していたので。もしペンで書いたら問題が出たかもしれないが。でも、「パタン」と「パターン」などのカタカナ語の表記を直してもらった。これは香港の学生の問題かな。英語はわかっているけど、それを日本語の音に直す能力はない。

しかしながら、今回の交流の本来の目的であった「日本語で書く力の向上」については、(51)、(52) のような回答が得られ、効果が感じられていないことがうかがえる。

(51) 「作文を書く力」の定義によるが、わたしの定義では正直に言うとあまり…。わたしの定義では、「作文を書く力」は、構成や文型、例えば、「研究者は～と指摘している」のような。助詞の使い方などは全体的な日本語力だと思う。文の構造については、向こうからあまりコメントがなかったという気がする。

(52) 向こうの学生は熱心で、コメントをくれて、たくさん直してくれた。説明も詳しかった。自分は上級（日本語クラスを履修する）学習者になっても助詞の間違いをするのは情けないが、向こうの説明は日本語の指導書からとった説明みたい。例を挙げるときも、初級レベルのとても簡単な例だった。

さらに、実習生からのコメントについては、(53) のように「訂正するだけでなく、ポジティブなコメントを」という意見が得られた。教師として対面式の授業を行う際にも考えるべき問題である。

(53) コメントについて言えば、向こうからは文法上の表現についての問題についてはコメントがあったが、「これは大丈夫です。」とか、ポジティブなコメントがあるとよかった。「これはいい。」ではなくても、「こう使ったら問題がない。」というような。わたしの場合は初めて日本語でレポートを書いたので、そう言ってもらえたら安心できる。

7. まとめと今後の課題

今回の考察を通じてわかったことを以下のようにまとめる。

- ①「雑談」は学習共同体のメンバーである実習生と学習者のよい関係を構築し、交流の活性化に役立った。
- ②「雑談」は学習者の日本語力（口語の中で使う文法・語彙、書き言葉と口語的な表現の使い分け）の向上に効果がある。

今回、実習生が自ら積極的に「雑談」をしようとしたことは、学習者とのよりよい関係を構築しようとする意識の表れであり、教師としての成長とみることができる。ウェブ上の交流だけではなく、対面式の授業にも応用できることであり、実習生が将来教師となった時に指導に生かせるだろう。また、フォローアップインタビューで学習者から得られた「実習生から肯定的なコメントがほしかった。」という意見は興味深く、実習生から学習者に対するフィードバックのあり方についても検討する必要がある。

しかし、本稿では、本来の目的であった学習者の「日本語で作文を書く力の向上」に効果があったかどうかは検証できなかった。今後、教師が一人で作文のフィードバックを行った場合と、今回のような協働学習を行った場合に、完成した作文に差があるかどうかを比較する調査が必要である。また、実習生には上級レベルの学習者に対する指導経験がなかったため、上級レベルの学習者が日本語で作文を書く時にどんな指導を必要としているかわからなかったことも、今回「書く能力の向上」についての検証が十分にできなかった原因の1つであると考えられる。今後このような交流授業を行う場合には、日本語力の向上を目指すなら初中級で日本留学経験のない学習者を対象に実施すれば、ある程度の日本語力の向上が期待できるかもしれない。あるいは、このような交流授業では日本語力の向上を目指すのではなく、教室で学習できないことを雑談から習得することを目指すというように、目標をシフトしていくことも検討すべきだと思われる。また、交流授業を開始する前にその交流授業の目標を明確にし、それを意識したグループ分けをしておけば、改良につながる有益なデータが得やすくなるであろう。今後の課題としたい。

参考文献

- 菊岡由夏(2004)「第二言語の教室における相互行為-“favorite phrase の使い回し”という現象を通して-」『日本語教育』 vol. 122. pp. 32-41
- 重田美咲・三浦房紀(2011)「工学系大学院留学生の効果的な日本語教育について」『山口大学工学部研究報告』 vol. 61. No. 2. pp. 9(33)-16(40)
- 中西久実子・村上正行・上田早苗(2011)「SNS を活用した日本語教育実習生と日本語学習者の協働学習—SNS 上での交流を活発にする要因とは—」『教育システム情報学会誌』 vol. 28. No. 1. pp. 61-70
- マリーン・スカーダマリア・カール・ベライター・大島純(2010)「知識創造実践のための『知識構築共同体』学習環境」『日本教育工学会論文誌』 vol. 33(3). pp. 197-208
- 三浦正江・上里一郎(2012)「高齢者におけるソーシャルサポートの受領および提供とメンタルヘルスの関連—性別による違いに着目して—」『東京家政大学研究紀要』 vol. 52(1). pp. 41-46
- 望月俊男・北澤武(2010)「ソーシャルネットワーキングサービスを活用した教育実習実践コミュニティのデザイン」『日本教育工学会論文誌』 vol. 33(3). pp. 299-308
- 山田政寛・北村智(2010)「CSCL 研究における『社会的存在感』概念に関する一検討」『日本教育工学会論文誌』 vol. 33(3). pp. 353-362
- Short, J., Williams, E. and Christie, B. (1976) *The social psychology of telecommunications*. London: John Willey & Sons